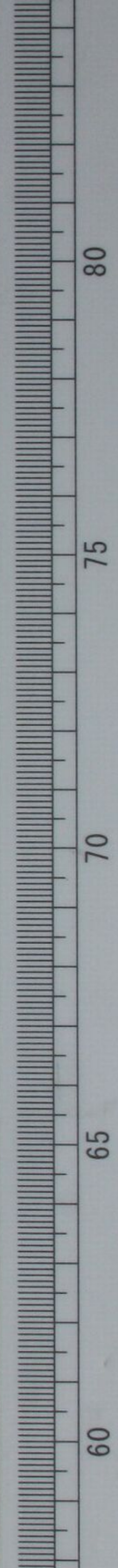




中村俊定文庫
文庫 18
267



此
抄



先師或時の序不違不討し信なるん

花帳何ん句身是平家廻し其信と
以不無

千差万別今日如道悉是尔是也
此語の骨髓亦必家平座寸 花平問え違

語らり何里深き其れ平道不

廻し其語も平家祖傳了物是虚平居る
實平働廻し其の詞を多ら平
了解し自と立他を教るは謂れ
誅平先師是虚平虚偽の言而下 茲平抄書

如手ゆれりふ順じて親に及ぶ
白紙の巻と十巻との名を
詠み我を正次是又信と諸と離
とて好まなく可き序を思ひ出
今河もあまの細よのなる

寛保壬戌初冬 曾中吏登



雪中

入月の如を腫れ鮭うの
秋らあやしく白紙山吹 蒨青
畦作らぬ紙子春の軒是は
布強る若の牛、中尋所 中
借て好まぬの心はなまふ 全
寄るこゝして空に立前 全

下河げし物置の南に河物瓦
目打のなまを秋のまき
見酒をすらしも河田骨
向ふさか星の門の石橋
あまのまき先の花の河なま
吹矢小鳥今か〜
河のまきかけ並つる河串鮎
海土如炭焼小具物替

中
中
中
中
中
中
中

伊勢海と北の他ははれて
一祀の海とやんかけ西
常通の焼と河なまのま
た〜の如くはまの焼下
る〜の如くはまの焼

全
中
中
中
中
中
中

山里地未如芽を種も如榮摘葺

杖を見て遠魚杖如旬 蒨青

笑士の如より好所も如也あま

直平池利の玩なりり

香如自曉て若月又日雲り

秋の花脚如穢齋て行

種登
卷洲

小濱の貝見せむとて玉編一統
 夷ちか宿体後きし元
 舞じふな都わし人如戯て
 琵琶如宿多輪獨也次
 長祿中毎一枚の掙々能
 か所牡丹多蝶のちりさ
 玉用ちやしつる所此のまみ
 相織身提ぬ出所ち子海
 洲 香 洲 香 洲 香 洲 全

朝飯のつらうとてやんまは月
 ちわち華集はふららの還留
 活ぬを柳多かむてかおし
 乳膚ゆひして子如母念は
 常も多由地さくの子や後
 常我の建久二年三年
 常なるは口多香成たて
 瘡ぬ所むの押おさるは
 香 洲 香 全 洲 香 洲 香

舟楫一々の浦のまをりては
 舟 洲
 舟の塵を黄もほりては
 舟 洲
 候つてなめても狭い其所
 舟 洲
 燈の河く河の岐のこゝか
 舟 洲
 舟の月澄む如く梢道終り
 舟 洲
 甘水塘も老たして始に泡
 舟 洲
 古酒の有市今夜は行合
 舟 洲
 新鞍かたむし見え道河馬
 舟 洲

街のむきこゝ一日の日は布地系
 舟 洲
 舟の股を解し産卵の場
 舟 洲
 舟をくわへ浦の神のこゝか
 舟 洲
 舟をせ見へけしお舟も穢舟
 舟 洲
 舟の舟の根をさる舟も穢舟
 舟 洲
 舟の舟の根をさる舟も穢舟
 舟 洲

うこの思を動くはた美事

吏亮

新さし一夢の心事の目時

蒨青

常の事ありは糖を研るも

超波

蓋の志細くは陽を照る

亮

空の事南天の心朝は月

書

初修けて是の心は波

波

十年の間予人如浮世
 行燈し燈けり世の文
 不甲斐なると出舟の袖を引ち望
 西日事ゆく花のよみ歌
 杉の扇も轉回し船ゆく
 夢さぬと記し少くもつれ
 縁衣と奥ひき出す人はれ
 夢さぬと記し少くもつれ

亮 波 喜 亮 波 喜 亮 波 喜 亮

月さぬと記し少くもつれ
 我具の心よりはれぬ私言
 名桶の袖も胸もはれぬ
 神風や伊勢のくまのつれ
 夢さぬと記し少くもつれ
 庵の白ゆも記し少くもつれ
 投しぬ頭巾の面白き

亮 波 喜 亮 波 喜 亮 波 喜 亮

朝河よりかきくつ場河の櫻
 花としてさきさき花は極る
 雛の比ぶつと思ふ如く三人
 と口よりかきくつ河の少女
 百歳ともかきくつ袖の月
 多物は色々秋のツギも
 初草のまつり中へ入院し
 や海へまきくつくつのかみ
 波 青 亮 波 青 亮 波 青

欠くつのかきくつ河の櫻
 花としてさきさき花は極る
 雛の比ぶつと思ふ如く三人
 と口よりかきくつ河の少女
 百歳ともかきくつ袖の月
 多物は色々秋のツギも
 初草のまつり中へ入院し
 や海へまきくつくつのかみ
 波 青 亮 波 青 亮 波 青

執筆

康谷

蒨青

全

谷

全

書

山門是也く糸一葉さうり
 踏かゝりて所をみれば
 かけはしのひき手分りて張り
 人知れぬもの春所もと
 さふらぬ氣もあはれよも何月乎
 康谷子年相大報時つ河

念平念入一永永の年つる
 娘の〜ぬぬ月夜
 念平念入一永永の年つる
 娘の〜ぬぬ月夜
 念平念入一永永の年つる
 娘の〜ぬぬ月夜
 念平念入一永永の年つる
 娘の〜ぬぬ月夜
 念平念入一永永の年つる
 娘の〜ぬぬ月夜

念平念入一永永の年つる
 娘の〜ぬぬ月夜
 念平念入一永永の年つる
 娘の〜ぬぬ月夜
 念平念入一永永の年つる
 娘の〜ぬぬ月夜
 念平念入一永永の年つる
 娘の〜ぬぬ月夜
 念平念入一永永の年つる
 娘の〜ぬぬ月夜

杉の葉の香を溜さるる物毎
とらふも心も春の下園
一擣草履の足跡も
世もはやくも
堀起る草も
掃く仁舞くも

李山

蒨青

全

山

全

名

卯の暁を渡りてはあけの光
 始納心はなほかき平橋
 三浦の夢は短く思ひおぼるは
 片葉の舟はあけの光の暁
 今城の橋はあけの光の暁
 舟はあけの光の暁の暁
 池はあけの光の暁の暁
 山はあけの光の暁の暁

旅人はあけの光の暁の暁
 衣はあけの光の暁の暁
 定心はあけの光の暁の暁
 何れの時かはあけの光の暁
 腰はあけの光の暁の暁
 雛の契はあけの光の暁の暁
 山 山 山 山 山

垂枝

夕のげや車あゆり夜目かこも
漆く仲のこも何打ぬ
蒨青

植むをー白く何れも葉居ぬ
葉五

席紙見んといハハも
枝

川旁か着る衣の荷物つら
、

福のな何様か
喜

似瀧亦も海舟の物吹こらり
たしは白雲の雲千
家風の押し留持のり
あまの舟のまはるの
月代も吹かむ風は星の色
あまの舟のまはるの
あまの舟のまはるの
あまの舟のまはるの

枝 青 枝 青 枝 青 枝

あまの舟のまはるの
あまの舟のまはるの
あまの舟のまはるの
あまの舟のまはるの
あまの舟のまはるの
あまの舟のまはるの
あまの舟のまはるの
あまの舟のまはるの

枝 青 枝 青 枝 青 枝

山くみ船系よせし河あまのり

莖園

山石冑如夏の虫くあは

蒨青

海舟あし一挿か川越へ

全

くちりよよしく遠か里人

園

あ地頭のを成せしあ所あ月

全

垢菰不巻も穂あそくあ

書

雇人ものあはれなるかたは
 夢のさるのあはれなるかた
 木崎のさるのあはれなるかた
 史取のさるのあはれなるかた
 志取のさるのあはれなるかた
 のさるのあはれなるかた
 技取のさるのあはれなるかた
 山取のさるのあはれなるかた

書 園 書 園 書 園 書 園

けれきて後者のあはれなるかた
 婿のさるのあはれなるかた
 女取のさるのあはれなるかた
 取取のさるのあはれなるかた
 取取のさるのあはれなるかた
 取取のさるのあはれなるかた

書 園 書 園 書 園 書 園

くさくさくさくさくさくさく

くさくさくさくさくさくさく

くさくさくさくさくさくさく

くさくさくさくさくさくさく

くさくさくさくさくさくさく

くさくさくさくさくさくさく

沙羅

蒨青

全

羅

全

青

其婦小曾およそはらへりて
 鮎子から娘座へおゆは
 神主如吉實しくは別女
 林切山次山の塚目
 咲か河津毒のシメは清阿り
 鯉子別河初瀬の乃筋
 河畑入の何れし行小風呂浦
 市の崎道と見皆揃へ候

觀林 羅 林 書 羅 林 書 羅 林 書 羅

打鳴成撞樓事おつむる如月
 灯小犬の輝かるる如路
 前舟事並れりる河う河舟
 字敷の只く娘志の音か
 さらさらしる河は流るる如
 日かかすくく物さ如庚甲
 日かかすくく物さ如庚甲
 日かかすくく物さ如庚甲

林 書 羅 林 書 羅 林 書 羅 林 書 羅

けしきの我が身はふたはくしと
 羅 暮 林 暮 羅 暮 林 暮 羅
 鶴の雲を渡りし白印 磯 割 松
 霧もあつらふ身は 津 守
 ちりりと 木 田 の 丸 金 網
 樽 所 を 髪 雨 下 仕 の 腰 如
 南 天 の 雲 も ち り り 風 子
 志 事 越 白 如 暮 ぐ ち 切 り
 林 羅 暮 林 羅 暮 林 羅

番 匠 の 道 々 水 流 次 河 づ り 瑞
 羅 暮 子 一 一 一 一 朝 飯
 見 遠 西 中 な 女 の 又 六 人
 美 子 踏 一 一 一 一 文 若
 目 の 脚 子 面 赤 し 一 一 柳 一 け
 新 子 梅 一 一 一 一 留 打 せ 一
 林 羅 暮 林 羅 暮 林 羅

初しや藤ノ屋ニ入リて

木焚

酒を飲ミテ客は月の光酒

蒔青

地も如くも酒も清くは

左枝

乃の如く入る所は

吏登

吾も入る所は酒買の

者

八門の日々も

也

祝師堂如勅のこゝろ水也
来下ふらして月少き鴨
海に望めぬ心は後高木茂
五十一の命の人の五人
各々の持録を子傳を紳お
書も是も海に傳はぬ
書林のく書も中角のく書
船をうあ煙を川に河く
書 煙 之 伎 然 書 伎 之

白の少の記のひの毎に猪豚
高あ中平年流海お中平
仮右を手に書右もけしたは
親もも世もあお居るを學
燕の書も中よれ海遠る台
向くゆれもぬは書也
伎 書 之 伎 然 伎 之

木
洞

茅の多き動はるる風の時
人々の舟に里の船所
海書

目のもつ山福子馬の道つし
園缺

将のともまらぬ所を
洞

昔年のむく食の何物
書

根舟のま子のらふと日
缺

矢かすしつ河内利おつ先水
おんのかみおははるる
とれおん流し近江の麻白田
全ふれおる河内家お商人
瀆おるお流しは後家お商人
秋行燈のくく闇おる河
音の暮の夜おる石お打落し
珠教志おるもまをまおる

河内 河内 河内 河内 河内

百位も土生おる河内
おる河内おる河内
新しん鹽おる河内
河内のまおる河内
おる河内おる河内
河内おる河内
河内おる河内
河内おる河内

河内 河内 河内 河内 河内

あつたつて誰か若くも融教具豆
鴨鴨もし幸りいぬか
杖笠もせば月夜可
どゆゆくきつて目も
頃刻も大方か
世話もいふの
去年まてさう
いふも何
いふも何
いふも何

あつたつて誰か若くも融教具豆

夏月見て野良さういふ娘

いふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふも

あつたつて誰か若くも融教具豆

振袖の澄くか何志れぬ

汶泉

白紙の先子去猶若行

萍青

冬の月照酒の煙色

湖十

胡座如脈の河の波

木髪

砂降の煙も少紅如身か何

書

蠟子吸りし魚籠の集

息

古き如味芳名かきし塩の湯 妻 髪
 人手連糸針をけしきり 妻 髪
 女房の指し海にのぼる海に 妻 髪
 鏡の中子七夕の菓子 妻 髪
 赤貝の香は河原の菫花 妻 髪
 之入人繩子流五くお把 妻 髪
 想くの傍に水針糸法は宗 妻 髪
 下魚ハ喰も焼塩の菜 妻 髪

更所のあしは見えぬ日記 妻 髪
 馬鹿な名付も美如志舞 妻 髪
 妻の月口乾江の集りて 妻 髪
 舞のよし舞かきりし 妻 髪
 猫のく一軒無麻入茶門 妻 髪
 物事あはれおの帳物 妻 髪
 炭消の蓋はしし地蔵所 妻 髪
 子猫回の白父は月代平埃 妻 髪

髪海交かけて道の峯入送ゆ
 月中鳥如暖地乃
 何れと拾子、赤江草如
 黒谷川り阿常徳院中
 古雨平唐大津のふとこ
 云家後如多る何
 金の昔如産圃居登り如音
 虹平とくーいまれの雲

鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥

何とも生れ如る何平居取
 善理平買り何園如鳥樂
 此の時如引い迄東海子
 牛小麻出て雨り何横町
 教の集の雨年如如のさけ
 系くくも何小袖如し中

鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥

拾翠

廿

枯く入日手も甘地指の
氷行今ふ湖如如
のそく旅者総縁成見し
さーさしり如刀なるり
高のそくし如月
酔物さし別名

曜馬
蒞青
半賦
る
書
賦

三平のしつゝ魂のけり海も腐
 けり者たけり人へのさあは
 挿えうさしつゝに問に各
 毛費はかかるとる物の油
 山崎の賤の地へ入る船の便
 くれは海よりかきつゝの
 筆のたけりしれぬるさる月
 新酒も酔ふて程高目行
 言 言 言 言 言 言

四角の頃の事あるは力町
 井戸側へは海ありて
 おりなほお家園との物ま
 結ぶつゝしめ舟身は
 新酒も會所ははら
 ころのうか海内は紙の
 赤目の毎白と當り清
 見え来なくしてはか
 言 言 言 言 言 言

彌念の娘河の親と海
 守はさく入河かすく
 碎巻お切河白張城投か
 はまんと捨らるる心
 海端平廿六親の証か音
 そよく風もどくあ秋
 み彩平梅戸くこく娘信ら
 媒与平河の細河か河

賦書 可 賦書 可 賦書

水波の曲の心河世ありあ
 庭掃らけ河さあけ替
 目手見入の娘音河大二十
 水行布おけの句いさ光
 香の河の流り集の目わ吹
 先音海音河くあか船

賦書 可 賦書 可

固秋

牛車のふかのかき一書はあ
音面へ細くおりの神

海書

石風呂の煙の如くは

木割

茶賣の如くは

舟

千の月夜の中は

書

草綱馬の如くは

測

如も指さるる者の淋か
一里かして者の酒あり
別と行く者の酒の魚の酒
兄の嫁しておけぬ人
是眼何れ通い居して家来の
待日あかして又あ日に
はと現る方よの長き道の
ゆよゆゆゆゆゆゆゆゆ

朝の月輝も手集りて
鮎沼も海所のお糸
物多しとて何れか風
今夜の月見もなほ
山伏の道も閑事か
まのくもくもくもくもく
織場も形物も細糸は
四の字もくもくもくもく

水鏡の朝日くおあかつ母
草のま石かた河難流
まかしのゆ欠か河西大寺
ともしまきか内道入
腰へし休む時の度り足
船さくまのあつ七月如月
梅さかしのほいなる風の音
木咲か朝湯のまかあま露
流 書 秋 測 書 秋 測 書

くまの山湯を登りて巖
娘あかき由り河狭白
名物のまか河人かまはら
春のまかまもまか山國
娘ひまきまのまか河
卯山湯まかまか
流 書 秋 測 書 秋 測 書

五つぞせもんはなまけ集哉思ひ
とめらし子なまをささりて今年
月平鮫の腫なるをより雪お牛如
印のあかなましおはまりて枯あお
散りくむろふりるの嬉巻投四時
不當り何冬やの時如雪多地小
少く見ん人心せよ

春燈齋

蒹青

寛保二壬戌十月

書記
校合
補助
彫工

馬蹄
百川
春曙
吉田

蓮佐
莎竜
平舎
魚川

3)

